

マタイによる福音書 25:14～30

「神さまから与えられた賜物を活かす」

2025年8月10日(主の日)

笹野信治 (横浜訓盲学院理事長 神奈川連合長老会個人加盟)

(横浜訓盲学院の紹介)

今日の礼拝では、私の勤めています、横浜訓盲学院の子ども達のことと関連して、神さまから一人ひとりに与えられたタラントン、つまり賜物についてお話しさせていただきたいと思います。横浜訓盲学院の創立は、1889年(明治22年)に創立され、昨年、135周年を迎えました。横浜訓盲学院は、今日(こんにち)まで、目の悪い人のための学校、つまり、盲学校として、ずっと歩み続けてきました。

(横浜訓盲学院の2つの特長)

でも、普通の盲学校と違うところが、2つあります。一つ目は、日本でただ一つの私立(わたくしりつ)の盲学校ということです。全国には、たくさんの盲学校がありますが、私立の盲学校は、横浜訓盲学院だけです。後は、全部、県立など公立の学校ということになります。それも、キリスト教の愛の教えによって、学校教育をしていかななくてはならないという思いで、今日まで、キリスト教主義の盲学校として存続しているということです。そして、二つ目の特長は、他の盲学校と違って、普通部に在籍している人は、視覚障がい他に、他の障害を併せ持っているということです。つまり、目の障害の他に、耳に障害を持っていたり、肢体不自由、つまり、体に麻痺があったり、さらに、知的障害などの障害を併せ持っている幼児児童生徒だけが在籍している盲学校ということです。二つ以上の障がいを併せ有している人のことを、重複障がい児とか、重複障害者と言います。そのような重複障害の子どもたちだけが通う学校です。横浜訓盲学院には、現在、生まれつき盲ろう、目が見えなくて、耳が聞こえない生徒が、9名います。それは、普通部の生徒の3分の1にあたります。

(「盲ろう」の状態とは)

皆さんもちょっと想像してみてください。もし、今、あなたの目が見えない状態で、耳も聞こえない状態であったとしたら、どうでしょうか。真っ暗闇の中で、目も見えず、周囲の人の姿も声も全く聞こえないとしたら、どうでしょうか。さらに、目も全く見えない、耳も全く聞こえない状態で、町の中に一人放り出されたらどうでしょうか。周りがどうなっているか分からないので、怖いし、ストレスもたまって、「もうだめ。助けて。」と叫び出すかも知れませんね。横浜訓盲学院には、そのようなたくさんのハンディキャップを持った、子どもたちがいます。でも、みんな元気にニコニコして勉強に励んでいます。

(聖書の御言葉に聞く)

さて、前置きが長くなりましたが、今日は、今、お話ししたことと関連するのですけれども、イエスさまが、たとえ話をとおして話して下さった、一人ひとりに神さまから預けられている賜物、タラントンについて、早速聞いてみましょう。

(主イエスが語られたたとえ話の一つ)

今日の聖書箇所は、イエスさまのお語りになったたとえ話の一つです。イエスさまは、タラントンのたとえ話をされました。

(聖書箇所の内容)

ある人が、かなりの長い期間、旅に出たというのです。そして、その主人は、留守の間、自分の仕事をしっかりやりなさいという思いで、自分の全財産を自分の3人の僕、つまり使用人たちに預(あず)けました。それぞれ、5タラントン、2タラントン、そして、1タラントンを預けました。そのように一人ひとりの僕たちに与えられた財産のことをここでは、タラントンというお金の単位で呼んでいます。1タラントンと言うのは、6,000日分の賃金に相当する金額です。計算の仕方によっても違いますが、1年の収入が仮に500万円だとすると、ざっと1億円ということになるでしょうか。その意味では、5タラントンも2タラントンも1タラントンもそれぞれ、相当な金額です。この僕(しもべ)たちにとっては、それまで見たことも考えてみたこともないようなお金をばんと預けたのです。

(「主人と僕たち」とは、誰のことをさしているのか)

ここで、イエスさまは、たとえ話をされているのですが、「主人」とか、「僕」とは、いったい誰のことを指しているのでしょうか。この僕たちというのは、イエスさまの弟子たちのことであり、そして、私たち一人ひとりのことを言っています。この僕たちには、主人がいます。この「主人」とは、イエスさまのことであり、神さまのことをさしています。この主人であるイエスさまは、今、旅行に出かけていて不在だというのです。そして、19節には、「さて、かなり時がたってから、しもべたちの主人が帰って来て」と書かれています。この帰ってきてと言うのは、つまりイエスさまの再臨を意味します。世界の歴史の終わりの日にイエスさまは、もう一度この地上を訪れてくださる。それが、キリスト教会の信仰です。

(再臨とタラントン)

私たち一人ひとりの手元には、神さまからお預かりしたタラントンがあります。神さまは、私たち一人ひとりに、豊かな財産を預けられています。そして、神さまのためにそれを生かして働くようにと、その仕事を任せておられます。

(私たちの生きる目的)

自分は、いったいなんのために生まれてきたのか、どのように生きていこうかと考えたことがあるのではないのでしょうか。特に年をとってきて、今まで、できていたことが、一つ一つ出来なくなってきた、こんな自分は、惨めだと嘆くことはないのでしょうか。このまま、生きていく価値があるのだろうか。周りに迷惑をかけるばかりではないかなど、年齢を重ねて、特に、後期高齢者になってくれば多かれ少なかれそのように思うのではないのでしょうか。

私たちはそのようなときにどのように考えれば良いのでしょうか。その答えは、聖書の中に、イエスさまがお話になった、最も大切な教えとして明確に書かれています。大切な教えとして、マタイによる福音書第22章37節以下に『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』そして、第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分の

ように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」と主イエスは、語ってくださいました。そして、今日の聖書では、「神さまから預かったタラントン、賜物を精一杯活用しなさい。」これもまた、大切な教えです。

言い換えれば、この私にタラントンを預(あず)けてくださった、神さまのために生きるのだということになります。そして、神さまのために生きるということは、神さまを愛することであり、そのことは、つまり、私たちの隣人を愛するということであり、隣人のために生きるということになります。そして、それは神さまから、預かっているタラントンを神さまのために、そして、隣人を愛するために活用するということだと言えます。

そうであるならば、このタラントンとは一体何なのかとすることを、ここで改めて考えてみる必要があります。このタラントンというのは、先ほど申しましたようにもともとはお金の単位です。それが英語のタレントという言葉になり、日本語で言うと「才能」という意味です。そして、才能のある人、テレビに出てくる芸能人のことをタレントさんと呼ぶようになりました。ですから、タラントンとは、一人ひとりに与えられた、才能や賜物ということになります。けれども、このタラントンは、本当に特別な人にだけに、与えられているわけではありません。神さまは、全ての人に例外なく才能や賜物を与え、それを生かすことが出来るようにしてくださっているといえます。

(一人の視覚障害者の生徒の例)

私の今勤めている、横浜訓盲学院は、幼稚部3歳児～高等部3年そして、その上の、専攻科3年まであり、3歳から21歳までの幼児児童生徒が在籍しています。高等部専攻科に在籍している生徒の中に、成人式を迎えた生徒がいたため、「成人を祝う会」を開きました。成人式を迎えた生徒の一人は、産まれたときに、視覚障がいや肢体不自由、知的障害など、たくさんの障がいを併せ持っていることがわかりました。その子は、たくさんの障害を生まれた時から持っていたので、大人まで丈夫に元気に育つかどうか分かりませんと医者から告げられ、この生徒のご両親は、途方に暮れたそうです。その生徒が無事に成長し、成人式を迎えました。学校の「成人を祝う会」で、その生徒は、「お父さん、お母さん、私を今まで育ててくれてありがとうございます。そして、学校で、先生から、勉強をたくさん教えてもらったので、いろいろなことがきるようになりました。ありがとうございます。」と自分で考えて立派にみんなの前で、挨拶することができました。そして、自分の将来の夢についても話してくれました。

それを聞いたお母さんは、「この子が産まれたときは、本当、大きく育つのだろうかとか、これから、どう育ててよいか分からなくて、不安でいっぱいでした。でも、こんなに立派な大人になりました。産まれてきてくれて本当にありがとうございます。そして、優しく愛情を持って、指導してくださった先生方に感謝の気持ちで一杯です。」と目に涙をためて話してくれました。この子にとっては、他(ほか)の人と比べれば、視覚障がい、肢体不自由、知的障害を併せ持っているということで、様々なハンディキャップがあります。ですから、この生徒の出来ることは限られています。でも、自分に与えられた能力、個性、今日の聖書の言い方をすれば、神さまから預かった、タラントンを一生懸命使い、活用している。神さまも、この生徒に対して『忠実な良い僕だ。よくやった。主人の喜

びをともに喜んでくれ。』と喜んでくださっているに違いない。そして、神さまから預かっているタラントンを活用するとは ということだと知らされました。

(私たちに預けられたタラントン)

そのように わたしたちには、それぞれ異なるタラントン、つまり、一人一人違う才能、賜物が与えられています。一人一人、異なるタラントンを神さまから預かっている私たちの存在そのものが、生まれた時から、死ぬまで、神さまからお預かりしているものであるということになります。それをイエスさまは、当時、考えられる大きな額面で例えてくださいました。どんなに小さく見えるものであっても、こんな自分なんか価値がないんだなどというようなことは 言うていけないのです。

(タラントンを活かす)

先程も申しましたように、わたしたちは、それぞれが異なるタラントンを神さまから預かっているわけですが、そのタラントンをどのように活用したらよいのでしょうか。今日の聖書箇所では、主人から、5 タラントン、2 タラントン、1 タラントンを預かった僕 が出てきます。それは、単に多い少ないというだけではなく、人間は一人一人違うタラントン、賜物、個性を与えられているのだということを示しているといえます。一人ひとり、好きなこと、嫌いなこと、得意なこと、苦手なこと、など、どれも違います。性格も一人一人違います。それが私たちです。

5 タラントンと2 タラントン預かった僕は、それぞれ、そのタラントンを一生懸命に活用して、さらに倍に増やしました。でも、1 タラントン預かった僕は、そのまま そのお金を土に埋めてしまい活用しませんでした。

わたしたちは、神さまから預かっているタラントンをどのように活用したら、神さまから、『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』と神さまから喜ばれるのでしょうか。わたしたちは、一生懸命、それぞれに与えられたタラントンをたくさん活用して、今まで出来なかったことが出来るようになることは、素晴らしいことであり、とても、嬉しいことです。

先程、紹介した、目が悪く、肢体不自由などたくさんのハンディキャップを持っていた生徒も、もしかしたら、一生寝たきりで、人と会話も出来なかったかも知れません。でも、お父さんやお母さんの愛情。そして、お医者さんによる治療やリハビリの作業療法士さん。そして、学校の先生方による愛情あふれる指導、そして、なによりも、本人が自分に与えられたもの、つまり聖書で言うタラントンを一生懸命活用したことによって、この生徒は、少しずつ色々なことが出来るようになりました。頑張っているようになった自分も嬉しいし、周りの人も嬉しいし、何よりも、神さまが喜んでくださっていると思います神さまが喜んでくださっているのは、この生徒本人に対して、そして、お父さんやお母さん、そして、お医者さん、学校の先生方など、みんなに対して神さまは、喜んでくださっているのです。

(2 タラントンの僕の意味 私たちの思っていること、こだわっていること)

さて、ここで、私たちが、神さまから託されたタラントンを活用するときに大切なことがあります。2 タラントン預けられた僕は、5 タラントン預けられた、仲間の働きを横目に見ながら、「す

ごいなー」と思ったかも知れません。でも、この2タラントの僕は、自分が預かった2タラントに対して、「なんだ、たったこれだけか」と思ったということは書かれていません。この2タラントを与えられた、僕は、わたしたち自身の立場を言っているのではないかと思います。自分は、才能あふれる人から見れば、「あのような才能があればいいのになー」とうらやみ、自分より才能がないと思われる人と比べて、あー良かったと考えてしまう。わたしたちは、誰も、そういう立場に置かれているのではないのでしょうか。しかし、この2タラントを与えられた僕は、自分に与えられたものを心から喜び、それを活かし、そのように生きる自分自身を心から喜ぶことが出来ました。そういう僕のことを主人である神さまは、心から喜んでくださいました。自分に預けられた2タラントを見つめながら、神さまから委ねられていることに恐れを抱きつつ、また、そこに誇らしい思いを抱きながら、自分の人生を生き抜くことができたのではないのでしょうか。私たちも同じです。

最後に、全盲の言語学者で、キリスト教文学者の堀越喜晴(ほりこしよしはる)さんの言葉を紹介したいと思います。この堀越先生は、全盲ですが、この全盲というのは、全く目が見えない人のことをいいます。もと、立教大学でも教えられていた方ですが、彼は、このようなことをいっています。

自立とは

堀越喜晴(全盲の言語学者、キリスト教文学者)

「自立と社会参加」に関連して (2002年中国・四国地区盲学校教育研究会での講演)

生活するうえで自分のことが完璧に自分一人の力でこなせなくても、寝返りひとつつにつにも人の助けを必要としても、その人の言葉、生き方、あるいは微笑みひとつから周りの人たちが何か貴重なものを得ているとしたら、その人は立派に自立しているのだと私は思います。

◎盲重複障がい(盲ろう、盲知的障がい等)教育の事例

先程紹介いたしました、本校の生徒のことと関連しますが、私たちは、人を評価するとき、あの人は、偉い人ですよ。大きな会社の社長さんですよ。あるいは、国会議員で、活躍する大変立派な人です。というような方は周りにいます。そこまで、社会的に認められるのには、本人のなみなみならない努力もあったことでしょう。そして、人々の役に立つような仕事をされたのであればなおさらです。それは、それで素晴らしいことです。

でも、一方で、先程の、視覚障害の他にいろいろな障がいを併せ有している人が、自分に与えられたタラントを精一杯使って、色々なことができるようになった。そのことを、お父さんお母さん、学校の先生に素直に「ありがとうございました。」と感謝する。その生徒ができるようになったといっても、社会一般から見れば、幼稚園の年長さんのレベルかも知れませんが、神さまは、そのことではなく、与えられたタラントどのように活用したか、神さまから与えられた、恵みとして、喜んで用いたかを問題にしているのです。ですから、反対に、たくさんのタラントを預

けられた者は、それを、充分用いなければならぬでしょう。それぞれに与えられたタラント、賜物を充分に用いること、それは、たとえ、高齢者になり、認知症になって、少しずつ色々なことが分からなくなっても、その人に今与えられている、タラントを活かし続けること。それが、神さまによって創られた、私たちに与えられた使命でもあります。そして、神さまから、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。といてくださるよう、この世の生活を最後まで、神さまの恵みを感謝しつつ生きたいと思います。

お祈りをいたします。